

八代集抄

新古今集端真名序
假名序
四二

特別
14
3163
104(41)

140 1 2 3 4 5 6 7 8 9 150 1 2 3 4 5 6 7 8 9 160 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4

新古今和歌集

二十卷

哥貞八集より九百八十八首。万葉哥入古今集

皆不入く

元久二年三月廿六日後多羅院乃院宣下りて。
參議右馬つ^{トマツ}督通典。大鹿^{トマツ}ノ有家。太近中將定家
前上総少^{トモテ}家陸^{トモテ}右^{トモテ}將雅經撰進^{トモテ}。寂蓮^{トモテ}撰者
ノ入^{トモテ}。也^{トモテ}參讀^{トモテ}矣^{トモテ}。平^{トモテ}也^{トモテ}。也^{トモテ}哥^{トモテ}
上^{トモテ}是^{トモテ}也^{トモテ}。定^{トモテ}也^{トモテ}。也^{トモテ}序^{トモテ}。敵策
乃^{トモテ}也^{トモテ}。也^{トモテ}序^{トモテ}。也^{トモテ}就經^{トモテ}。也^{トモテ}高極嚴^{トモテ}の作^セ
に^{トモテ}也^{トモテ}。也^{トモテ}序^{トモテ}。也^{トモテ}序^{トモテ}。也^{トモテ}序^{トモテ}。也^{トモテ}序^{トモテ}。也^{トモテ}序^{トモテ}。



建仁元年

長房

定家ノ明月記曰十一月三日左中安奉書上古已後和哥

可撰進者スミタ此事被仰奪ムヨリシ所寄人ミ

元久二年三月亮高キタチカを私シテありて。承え二年之
月施行セイハシす。そのより作らるゝはれ或止マタシテ
或ハ始ヒタツく入ル。明月記略記陽邊ヨウヘン乃シテも上を左方
改ハシメ直チさせり。則上皇乃シテ清風キヨウフウ也。而
定家カネヒコ新葉シナエ野草ヨウソウ之ノまよふ。席シテうきひらめ
羅ラ乃シテ表席ヒラシテ。右シテ行つたり。其ノよのすくは
也。是等シテと並行ヒテ。撰者ハス人ハヤシ。其ノの姓ハシメす
定家カネヒコ。之ノをうけり。是等シテの姓ハシメす。

新義一

「れて奏覽シラタニ」シラタニは書き

撰者

通具ハ土津門トツモン内大臣ノホリ通就ノヨリ。母平ヒラ通國ノリカネ女号スメノの
定家カネヒコ。云ハ通具ノリカネ。通具ノリカネ。朝臣ノミコト乃シテ御作ミサワの
こと。至天アマツ乃シテ詩シをアシテ。寫スル。やく。わ。され
特政殿ハシメも。さう。あ。す。わ。も。よ
有家ハ大武童家ヒロミツトモ。息。左京大史ノホリ浦源ノリカネ。定家カネヒコ
也。有家ハ大武童家ヒロミツトモ。入ル。母ハ。や。一。き。う
を。持。ど。は。風。拂。こ。げ。よ。ほ。な。も。か。く。も。く。け
定家カネヒコ。後成ハシメ。恩。母。若。校。也。就。忠。安。義。福。門。院。の

伯耆房を号す。二条院通保元年、離せしもの
名、免まゆ比香免也。おはすり定家と号す
源氏乃小倉山、山筋あつアド。ドウテ少倉門と
二条、多種うりがくらんれど、多種中納ひぐり也。
はるの院乃貞承元年十一月、家より出立。清右
明靜といふ。家集を捨遺多き。家集れす
所。記原を明有記。四条院乃天祐二年、家
うけあづ。新物撰和琴集を撰進。まかむ本丸
もああづ。つひす。に治二年八月廿九日逝。平室
定室。朝野撰和琴集。自撰の奏。元家家の貞林之井を拂ひ去

君とあつて是れを雪よす山梯戸乃あすぎり
かくは樓アラヒのまつり乃いわゆつよま
月余りがかりまづや。初月のきよりあかられ
月、又努力ありまづかく。一ヶ月の初月の處
御、神ミハラをとなね給ひよろこび室ムロおひに傳
ちとせ、おさすれ行ひたま人のがさすらう
物モノを破る所はゆゑよゆれりれぬき袖アシメの上アマ
事モノなれどかす年一ねくわにあせざづき
引ハサウエをすの間クダにやでやくがのきもこれ
いよひきがれ今それまよまの近アリがきみ

と、身が立たぬ。されば人
間もひあらず、とてよのまへてゆる事す。
まよひぬひく。やれども、かく、ひまへば、かく月氣
をさわる。其のはうきのまへか、さうびきくも、令ひうけ
にまき乃とのをゆくよしと、今まねよじつひの月
定家^{ハヂマ}。内府^{ノダツフ}。徳道^{ヅタシ}。乃^{カサ}
奈^{ハタケ}井^{ヨウ}の時^キ。内^{ナカ}房^{ボウ}。明^{アキラ}りと^{トコロ}。雲夢^{イヌ}を^{カシ}國^{カント}。乃^カ
小^{コト}よ。寢^{スル}。休^ム。と^モ。明^{アキラ}方^{カタ}記^{メテ}草^{サウ}。生^リ
仕^{ハシメテ}。身^{ヒメテ}。はいふらわ^{ハシメテ}。と^モひくす
徹^{ハシメテ}。書^{ハシメテ}。記^{メテ}。身^{ヒメテ}。あく。定^{ハシメテ}。家^{ハシメテ}。

冥ミツガかとあくべりす。蜀ハサウエイをもしか
又云八月六日キニハ定家タケル乃忌モラキ月ツキ。わが初生れ以テ來カミ下
まくは月ツキハ昂トヲラひきうをよきわし。又云空アムあ
哥ヒロハち入スル。ち身カラふありアリアカ
不ハ誰シと乃シテよき。きい無ナシ乃シテえ。家ヤマ宿ヨミ
タれども。よきのうひ乃シテえ。よきのうひ乃シテえ。
并ハシメテ詫エム。皆セモ空アム家ヤマ。義ヨシだよ。よ
云ハシメテ詫エム。大オホ概ハナシ。凡ハシメテ二ニ家ヤマのスルを望モリ。と
以テは。主シテ極ハシメテ蓋ハシメテ門マツ定家タケルのスルを幸タチとす。と
あり。定家タケルハ只シテ古今コジンを本ハシメテ。けり。とせり。

や。されど八十乃とさかまくべあつて、
きはねやふだ
うか成と。やういは骨ヨリと。第一の
げすううよけはゆかきり。せ一乃人あくべ
をあくまくと也

家蔵ハ中納ニ先登。母ハ太史失官。亮實氣節。安。木
名ハ雅深。子生二位。子。友。ハ。之。内。つ。家。集。と。子。二。
集。と。之。六。家。集。の。中。う。り。あ。つ。後。成。て。乃。門。中。第。一。

未諱ニ年八十家より卒
井枝が云家憲ハ寂蓮り知解シ。寂蓮れ伏生大
丈入乃和寺大門中よも力き。得門下云ひ人本

ま乃の哥仙。アラハ。又名乃の哥仙。別姓。モロコシ。
をハトモヒ。ヒモ哥仙。モロコシ。モロコシ。モロコシ。
モロコシ。モロコシ。モロコシ。モロコシ。モロコシ。
モロコシ。モロコシ。モロコシ。モロコシ。モロコシ。

はきけぬ。まだア貴殿ばかりうとうとあはせ
せし。さふれれば、付属志士をとりひく。二事の
哥倉を授け、ヤ。けり。彼は重代より、がく多
られ。古今ノ撰者より多く。定審によはば、じ名
をめどせ。す。、
ちづく再びスル。はく。はく。院
や金す。もくら。被放參さんせうひく。家産、求
代の人丸もくひや。せり。再をまよひせうひーと
させまひく。かくをせうひー。上人のおせき
くま。さひありせ。わく。うぐ。うぐ。うぐ。うぐ。

又云松板傍に引立赤痢アカシラをたす。うやすく。家了
吉貴乃民婆ミヤモト門うすまで。それへ信帳をす。あやて。せす
かううげある。鬼神。傍立をよび。けく。四月の十日
ひまわら。すれそく。らほせり。する。月少。げきを
よめり。うそく。寢坐して。は病。うらまら。よつね。
そ家謹。うだ。建保。九月十三日。内裏百骨の四代
河内ノ哥。しから。のう。は。法天を。御受。す。よ。こ。
不思儀。す。暑記。又云家謹。八十。天皇。うそく
とく。わゆい。時。七首。哥。とく。廻向。せ。まく。う
れす。萬。あれ。難波。の。よ。が。か。ま。は。八月

とがうきよとて 以降を念と

徹書記物度々家蔵へゆきててそぞくの凡骨を
よむれ。室家ハ執一筆され多かず。新舊撰より
家蔵久うからくいまづれはれば家蔵の集也す
あつ。但ヒシテ亡室射のあひてよ様ス。トウモ
さう。ござぬあつとゞ。おそれきしと

雅經刊部へ未經鈔古事。參議古事記傳カニ行に
井祖歌蘿。古事記一首。おニアリ

徹書記物度々雅經ハ定家乃門中一筆。やまとに代背
二桑家乃門中代もあら。只云豪ヨシがども。情等を

二羽ガラ五字アリ。かく。ハア。ア。雅經ハ室丸がくわち
ム。ア。モ。ミ。カ。ハ。ル。ア。ヒ。唯二桑家と。カウ。ド。物
れ古今集の事

定家。蘇頌。大抵。詩。不可。空。三。代。集。之。至。不。用。れ。古。今
古人。ニ。尋。因。可。用。之。

は普光是院。近代。凡。粹。之。都。古今。り。ぐ。而。向。之。甚。其。は。
幼。ア。人。ア。ハ。カ。ア。ト。ハ。ア。ト。人。ハ。集。を。ア。ん。と。い。そ
ハ。ア。ト。ギ。又。本。尋。ア。ト。ハ。隔。院。乃。百。首。集。ま。で
を。と。も。セ。日。く。ハ。久。人。ア。尋。と。こ。も。セ。勒。撰。ア。ハ。松
遺。も。セ。ト。ア。レ。ド。ト。ド。セ。但。今。ハ。金。葉。詞。花。文。載

おな今あざをとわうへりうてくもどりだ
お廻へきやけ。連哥うへがおな今もとくらまわ
代えうへ、近代の哥よそのうひがくとく
阿佛房に傳ふおな今じうへれやとくらまわ
立りやく。切ハからね(きし)森乃宿。ひづれ
とす。お寺のあきよとく。おまかよとく
きなごとく。歎めあはりよありぬ。一とくお
勅撰、およかくとく。おつ哥をえられか
あり。うかくわば

定家之明月記ノリタケノメイガク元久二年三月廿二日より以降中書ノウショウ被逐ヒツヅル
竟宴乃ハシマツトナリテ御食ノミコトシ之に十七日殿御ノミコトシ參スル後自神泉還御カミツクモアタマツル
ありあアトモ竟宴乃次第ハシマツ有事ヨウジ蟹多カニタラ少カニタラ墨多カニタラ
明月記稿ノリタケノメイガクコウ十一月廿一日在大典ノリタケノメイガクコウ持奉ホリタケ親經シキジン
了可覧ノリタケノメイガクコウ殿下ノミコトシ注新寧相奉ノリタケノメイガクコウ之預送ヨリハスル絵有ハサウエ被刪ヒツヅル更等カタマリ
或說ハナシよけ其名序ノリタケノメイガクコウ伏羲ボクハイ基皇德セイカウドク而四十萬年イシイシヤ異域イキキ自雖ラタケ
觀ノリタケ聖造ノミコトシ之書史焉ノミコトシ神武用ノミコトシ帝功ノミコトシ而八十二代嘗タタキタ朝ノミコトシ未タタキタ聽タタキタ虧策カツツク
之撰集ノリタケ矣ハシマツ此語後系在殿下ノミコトシ被副ヒツヅル事ハシマツ竹力タケノチカラ之
主ハシマツかすりハシマツ也ハシマツアリテハシマツ

九流



支和歌者群德之祖
新古今和歌集序

書翼奉傳云詩有五際注應劭云君臣父子兄弟夫婦朋友也並康
之詩內傳云五際郊廟午戌亥也陰陽終始際會之歲於此則有
變改之政六情白虎通云喜怒哀樂愛惡アラフこれに素鶩地靜
とハ日本紀云到出雲之清地スガトマツ注ヨミナライタタカムヒコラム
心清く之このまひ一不されハモリムのとすむのがり子と北若
公室カニシキのりつしや「ヨリ北神詠」カニシキ事假名序カニシキアヤシム假名歌
天地胸ミハもあたる又ヨリ北義午カニシキと乃當と申す、言ふも
人情乃彦姫翁系カニシキもよきよきと爲され、耳アツメもあつり、とすみの
爲りをとれりとれりとがりととりせ一官代カニシキおもむれりとすみ
静乃字カニシキ清乃字カニシキこかく、のみ吾心清く之と乃心也古今之名序小
神世カニシキ時代時賢人涼情欲無分和歌未作カニシキ遠于素交鳴鷺カニシキ到出雲國始有
三才之諺カニシキとすすむすすむをうへて云蒙天威素鶩地靜五際
六情三才と對カニシキ四六乃林カニシキカニシキナリ是中古乃之林也

引大序一

余來源流寔繁カニシキ長短雖異或抑下情
己の音ハ和焉カニシキ而達聞或宣上德而致化或屬遊宴而
やうてたりも國而達聞或宣上德而致化或屬遊宴而
あり、源流カニシキ書懷或採艷色而寄言誠是理世撫民
あり、ホ乃御カニシキ之鴻徽賞心樂事之龜鑑者也

序源流開鑒の付
どうつせりと文選乃序の後長短雖異といはる者乎とす
然にしてあるとも上下君臣もそのはとの極萬物之乃物を
やうてものとすへんとす。抑下情而主之、此ハ臣下乃のを
井の上聞カニシキをもとめ、宣上德而致化カニシキ君方之法を
もとめ、下情を仰カニシキこと化といふ事す。之のと景
変化カニシキとす。屬遊宴而書懷カニシキは在柔酒萬物のとせりとせりと
物色カニシキをひかりあつてのと寄言といふ事す。すこやかにやうす
らしく深とひなむがよし假ひてさとすすけゆべし理せハ世を浮

也擇民之民をあらうじとひの鴻の大也徵ハ繩也鴻徵ハ大綱とり小心
賞心樂事ハ賞ハ嘉也玩也文選謝灵運擬魏太子鄭中集八首詩序
え天下良辰美景賞心樂事四署雞子山字也龜鑑ひくくつゆ
ちくく小也をがさも民をうしゆう賞玩一事りくみじ本代大綱
未徳すと和舟をいりて下情達聞上德致化ハ聖世無民うけ
詮真彩色ハ賞心樂事にけてる「一鴻徵魯經字對」
是以聖代明時集而三

是以聖代明時集而三

是以聖代明時集而錄之各窮精微

撰集一

何以漏脫

七十四

然

今は集と撰りて

四

聖代明時之延

四

喜天廣

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

然

錦句玉章

權少將藤原朝臣雅經等不擇責賤高

之序

神明之詞佛陀之作

下
令
攝
錦句玉章

神明之詞佛陀之

神祇部より去乃多

作
寫
表
希夷

雜而同隸

子亦ちよへく佐美の

直義とて乃どうい釋教部より清も觀音序有りのういとす

希夷老子經云規定不覓名曰夷聽之不聞名曰希ト何リ乃とす

まつてアリシテ乃乃乃乃乃乃トアリスルシテノ佛神乃近事と

モナリスモナセリと隸玉篇云カ計切附著也逍遙院殿ニルスコ丘昔

始於曩昔迄于當時

じきせれうとみ

始於曩昔迄于當時彼此總編各得

集了乃乃迄了り

星進每至玄圃華芳之朝瓊砌風涼之

こすり

玄圃

楚辭曰朝發輶

於蒼梧

夕甚難波津之遺流尋淺香山之芳

於蒼梧夕余至平

縣圃注縣育玄縣

躅式吟式詠拔犀象之牙角無黨

圃在崑崙之上陶

無偏採翡翠之羽毛裁成而得二十

滑讀山海經詩云迢

首類聚而為二十卷名曰新古今和歌

迢槐江嶺是謂玄

圓丘之潛確類

書云玄圃即縣圃

集矣

也葛仙公傳云崑崙一曰玄圃

環砌之環玉篇子道砌石甃金三

玉砌うしり也かく一玄圃也崑崙乃一名也く玉乃こうとす

トナリハ名院の仙洞乃ゆうといふてえ久乃唐時名名院

乃雖は序碑帝ひの行くをうけむとあさとりてあうひは集

えくちせりうけりく若躅ひうりき門とこよし式施職切音釋用也

モツテニ逍遙院般丘也式吟式詠ハ詩大雅式號式呼のみ文体也

犀象ハ牙角乃可圓狀也無黨無偏ど周書洪範云無黨無偏王道平々註

黨

不寄也偏不守也と無黨無偏ハ已ウ私を何ラシム也
翡翠一種而二色
翡赤羽翠青羽と也モ乃ラ内ナキ多モナハドモアリ
アリトヨク吟味ノク犀角象牙のこゝロトヨモ哥を授也
私ち^ハシテ^{シテ}
ハタチニミスミ
翡翠乃ガの^{ハタチニミスミ}モウモニ哥をナリ也^ニ朗詠ニ言語巧偷鸚鵡舌
文章分得鳳凰毛^{ハタチニミスミ}モウモニ哥をナリ也^ニ裁
成^{ハタチニミスミ}かくまくと^ニ類聚^{ハタチニミスミ}之春哥^{ハタチニミスミ}春部^{ハタチニミスミ}集^{ハタチニミスミ}也^ニ
院内^{ハタチニミスミ}除^{ハタチニミスミ}とかをナラセ

時令節物之篇

時令節物之篇
時令とい春温々及熟林
冷暖をもつゝ
節物の時序の事
蓋云備矣

廣州，四月，
衆作離誄之什。什也篇也。
哀傷離別羈旅等
乃心也。內外也。群品也。其之也。

以少也絲緝之致之、少絲之機縷緝之續也、續也。之す。乃つま
ノミ又少之集乃舟才連續とひ

鄧太后大嘆曰諸王乃
獨子也豈可使相處

史記
文帝本記云奉天子，法駕迎代郎。

了是也踐天子之位
又曰也同史記被本記

あやめ母馬鈎夢人吉
ひづる天子とお おせ

乃復引刀自刺，卒歿。
謝叔漢官而追汾陽之蹤，具

一。卷之四。漢高祖之死。
曰。劉邦之死。史記。後本記。乃曰。文帝之兄呂后。悼惠王。漢高祖。乃善子
有。母。母。鈞。更。人。事。之。諸。大。臣。之。文。帝。之。代。王。之。之。之。
之。之。天。子。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。
之。
之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。
之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。
之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。
謝。於。漢。宮。而。追。汾。陽。之。蹤。是。後。漢。之。院。乃。之。之。之。之。之。
謝。遠。

卷之五

宣德皇帝念曰奎寧有寄注奎君也 華夷詠二之華之都
夷之夷中也焉乃仁惠之至德之德而誠而敬而人
也而百年乃也而之春日野之草廬 論語而之德而人
德草草上之風ハラハラス 懈ハラハラス 万春之春日野とづけたり
春日ハラハラス 有氏乃祖神あれハ君主之神乃館也而之
主内民春自然乃常也あひうみアヒウミ あくちりアクチリ おはる
乃月ハラハラス あ月ハラハラス すすきを行ひうめとく月宴之宴千灯とく
とびう席の竹やく月乃宴ハラハラス お祭ハラハラス ちまつりチマツリ
ちわくとの祝ハラハラス

行ひてまことに集と携ひてあく一百玉より傳へんと一百玉六様代
乃ち「きし事」ところ

九

通異ノ月ニシテ空寂ニシテヤ密

桃神仙之居院下を仙洞と曰ひて是を御院と集とえりあつたと
考刊候はまうおさしゆべが集乃うとえりひづくよとがさしゆべ
てもと刊ハ削也又桃木也

斯集之為體也
是よりは集を入尋ゆ
且以爲承
七代集之外深索而徹長無遺廣求
中乃尋、撰用入
古今より彙載集まで
而片善必舉錐張網於山野微禽自
逃雖遠筌於江湖小鮮偷漏誠當視
七代乃集いふと
徵長いす「よき」也
聽之不達定有篇章之精遺今
序者もさくす「も」也
隨株得且所勒終也

伏羲
伏羲補史記曰蛇身人首結綱罟以斂佃漁故曰宓犧氏宓音伏皇德之
皇之君也三皇之祖也伏羲之德也基之本也始也異域之美也莫
聖造之書史之天子乃作之而作書也伏羲皇德之始
而作之而作之也伏羲八卦之說也書契之說也結繩
乃成之也而作之也宋仁宗皇帝太平廣記太平御覽水之
集行之也而作之也獻策之書也而作之也編簡之也
拾遺集卷之院皆自撰之也序之也其之撰之也一也而之成之
定知天下都人謳歌之史記五帝本紀云謳歌者不謳歌丹朱而謳歌舜之德也
之也而作之也遇達之也和平之也五代之也而作之也而作之也而作之也而作之也
之也而作之也而作之也而作之也而作之也而作之也而作之也而作之也而作之也

伏羲
伏羲補史記曰蛇身人首結綱罟以斂佃漁故曰宓犧氏宓音伏皇德之
皇之君也三皇之祖也伏羲之德也基之本也始也異域之美也莫
聖造之書史之天子乃作之而作書也伏羲皇德之始
而作之而作之也伏羲八卦之說也書契之說也結繩
乃成之也而作之也宋仁宗皇帝太平廣記太平御覽水之
集行之也而作之也獻策之書也而作之也編簡之也
拾遺集卷之院皆自撰之也序之也其之撰之也一也而之成之
定知天下都人謳歌之史記五帝本紀云謳歌者不謳歌丹朱而謳歌舜之德也
之也而作之也遇達之也和平之也五代之也而作之也而作之也而作之也而作之也
之也而作之也而作之也而作之也而作之也而作之也而作之也而作之也而作之也

不獨記仙洞

十三

不獨記仙洞無何之鄉有嘲國玉門之
道遙遊篇云何不樹真亦欲呈皇家元夕之榮有溫故知勸
之於無所有之鄉之心多無之趣不在丘壑乎千奇聖勝也

不獨記仙洞
十三
不獨記仙洞無何之鄉有嘲風堯月之
道遙遊篇云何不樹真亦欲呈皇家元夕之宗下有溫故知新
之於無何有之鄉之心修撰之趣不在茲平干時聖曆之
注言造化自然至道母王春三月云余
之中自有可樂之地也夫肩乃吾子莫與不若萬物此委身、用肩と云てあらうの所

不獨記仙洞
道遙遊篇云何不樹
之於無何有之鄉
言造化自然至道
母王春三月云余
也今ハ仙洞の事ナリはモアリテコトノリ咄風委内ハ月朔セドアリテハ舟
ナリテアリヒニ也皇家ハ嘗今内内ナリテ也温故知新ハ鵠流内詔有弓
延喜夜集乃古也行也トシル内ナリ今セ列モ同罪ト知ル
集行ナリセバ人トシムトシル内ナリ前引古今集乃五月初日ハ多
丁亦ナリ自氏文集ニ不獨記東都屢道里有困居暮適之便亦会知
皇唐大和歲有理世安樂之音ミナヒ文休を字せり修撰之趣
集撰ナリと斯ニ不在茲年詩詔乃富之壁曆之當代乃年と
さし引シえク二年より南行カ王春ハ春秋乃久主と云
トシス

序には萬物の祖和尊の大御子をめでておる
うちにはちりひけとあらわす 天神用闇乃より日本紀神代事上
あすか今和尊集乃の席にて了せり
今乃もまことに御代ノ事也 神代ノ、士麿
爾乃志あきりとてのいえやすりと
えきわうりやうすりとてやんや奈竹乃の事也
乃はおとどりせ一宇乃御也まくわたりとての事也
戸原乃は御はまくわ夷乃御也 させまく
乃修膳也
福原姫スガハ素盞彌乃はめつま
あはくよはくはくとつま夫ぬ乃御也ハ岐乃大
地祇とて御をやさかあり日本紀云あくわに黒く素彌の
黒川也アキラミの御をまことうとせんをせんを日本紀云然後

初序九

あり人の世よまわる
ウシ歎かうひうら
風流人うやうすと
うふうけり 男女の
中をやりうる身み
房中乃至じとす地

世をきめ民ヒ 和聲
教誡之鵠と古今序うりうり裏内ヒをやりけ世と清々をま
車勿湯ヒホ和声接するは世極民内ニ祥のりねくわくわく
と世をもとめとをうきうきハ詩内用南呂南と蘭門郷堂邦
國ア用テ天下と化するゆんことうるまくまく

アタクレハヤ 三版櫻集へ序
序中乃至じとす カタクレモ代に内ナキトこれを
世和氏ノタクレハ 桜集あり
カタクレモ代に内ナキトこれを
世和氏ノタクレハ 桜集あり

さうかうおこううのあれいよま
ゆきのまくまくうううううう
セとおなめ
民ヒヤマシムナリトせり

とやだとの帝ヒハ 乞家ヒ内ナリトて行うひ地ヒテ
あの帝代万葉集
延喜カ太々て廢

カタクレモ代に内ナキトこれを
世和氏ノタクレハ 桜集と
カタクレモ代に内ナキトこれを
世和氏ノタクレハ 桜集と

アタクレモ代に内ナキトこれを
世和氏ノタクレハ 桜集と

カタクレモ代に内ナキトこれを
世和氏ノタクレハ 桜集と

アタクレモ代に内ナキトこれを
世和氏ノタクレハ 桜集と

うそ乃ね吉けよとま
こゆへうすめすよめく乃とく
豆葉をもひくそ
乃むよも民のやむ
叶ふくゑわくそ
あおに禁ゆうぢ草木とくまをもくはく
舟乃むれぬくれ
集を撰くそ
左書院序文
文人と乃代名能
大義つる原服臣有家方近權中將原翁
美能はみ人の梨
臣宣家前上緑がる原翁服臣家櫻在近
奉承例とくや
じりよ時をわく
すくさきやく
哥のよきと集
人をかうりとくふくらんね神

花はくわぬすひまか
やれむれむ芦の下ね
ひるわぬすの花

と あらわしり乃ひむけと
わくづむせむとわくすり

ほくすわのれ

仙洞くわゆ御す因みへー駿はば成香ひ古今序哥の父母とす
泊まればくわゆのまに因みまう駿はばう多の駿すすすす
こまてきの行の差めどくまをまゆまくまくまくまくまくまく
はまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
せまく風流きくた只おうすをくがくがくがくがくがくがく
じくがくがく

万葉集・甲一集

万葉集アリハルの哥にれをのうす
キテカタウラムサ
古今トウリムアセ代乃集アリハ
トナム万葉中も
のうす

セルヒ集万葉よセ代集ニ用持

万葉集アリハルの哥にれをのうす
古今トウリムアセ代乃集アリハ
トナムトコヘルとのうす

玉門すは携捨遺
物携るもとす
万葉のあそべりを
る言青井口歌とす
而後毛法翁を産
ゆのふあうい
い集時をもとすと
きつす松林美鳥
あ方葉をすく携ひよせすりとびり方葉を漏脱のす
ほもひ今は葉すくとくすくとくすくとくすくとくす
葉のゆく哥とすくとくすくとくすくとくすくとくす
をあらわす中を携
えすかとよすての
たり苑ぶみすよご
ス多の個とくとく
すくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

蒙古と日本は魚の物

卷之三

をうへて
まかまく立田乃

九成神立昇和尊德

是よりわが今席の文は
にあひくは毎の都
とちほゆふをもす
衆衆者上の人々久人
多く重複立田のもの
といふもくらえ
あつまひよが

い哥のす 在明月記
おは風ありてゆき
お田川ぬますす
葛城の山の船うせ

九郎御主昇輦御
もひかくとくとくかくをも
のやうかえへぬよといする神りしの
郊ム熱ハ風アチャカツクの望
キハナラヌ乃ヨリのる根よ雪はれ
れどアタマモテアシテアシテ
モモモモモモモモモモモモモモ
キモモモモモモモモモモモモモモ
乃とモヒトモアサスミ乃寂モモモモ
モモモモモモモモモモモモモモ

よきともぬ
玉かと乃々のくよわきをもひ
あ、ゆみの田みあう
らすおもてとれ玉 ひやのそりのひる乃あうちよ那を
ろがのやのま様よ
唐かうつへ筋を
り経る年の事どう 人をこうひある乃橋のはよくちめ
てあせまくも
えをかくくとかうりあうとく
れゆきす
わくうりゆくれどとりづく
さきをよとさき
さきをよのりかへんに橋あひの窓へふきりひより徑て是
乃貴也ゆきせおうて民家賄モギてのみを知せまする哥しそが麿
す乃君もよのふを傷致スルてある處カタちの書せまのとれを立タチて見
立タチて見ミるをあたはる離別アお辞ハセの下れ山貞マサニま
りまくひ乃羈縛アあまくひひのと
りまくひひのと

群臣皆伏固請代主西
卿讓者三南卿讓者
再三之乞文帝以代王

向讓者稱武烈天皇乃ちさもと帝が御天皇されハ經神天
皇を大迹王とて應神天皇五代乃西孫也。故あよわに
セ大伴金村郡也。とあるをうへて帝位をすませゆ一時の
事也。是名自從ハ安德天皇而廢ヨガリテはよほとひ也。乃
れをうへしゆく、螺が螺もくて跨祚あり乍れと清足守貞親王が
すれられ古辭讓の際アリガトノ如くねりばす。モお
てゆくもす。あまりひきとハ寶祚とも天位アリ
きりせよ。也。

今やすまち名をわづれく。八隅知ハ言葉の如く仙覺が大八幡と
えどすくまつて。清足守とよどて乃の八幡乃仙洞とよ
えど唐子大佛門院よ清位をゆつせゆる。仙洞よりかづる
まつて。天子大佛門院よ清位をゆり。天子アリ此とありまく。仙洞より
補ふりせゆる。里乃住ハ八代也。大寺乃名くは多羅院。清位の阿政事
を補侍トカ。君臣の私を三井寺にて。清位も清之まづて。院より古寺

トモハ油西海男乃美事まくいお御りゆく人や吾朝おもて黒山山中
生ハテの心とやまもと私に鷦鷯日本乃名也神武天皇御内乃耶と
虫乃アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
殺聲と對春日野秋は鴻もれの字と對茶葉と月と對り去立方
わウ乃アアアア阿波を君ねかく民多ひきふ志川りあれハ建春天曆也
乃和琴國ちむせの字を君ねくけ君を吸ひし筆を擣せキと向比
わウ乃アアアア阿波を君ねくとらるを毫毛ぢて曆のせとさすモタクシニシル
乃御ま吉には撰の字をあくわすふ人乃としがをうそをうそと
まくひと字のよ
十一
十日記集釋もみと
カ乃一方葉ハアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
トモハ油西海男乃美事まくいお御りゆく人や吾朝おもて黒山山中

万葉はうよのすうり。ことへてよもぐ今乃人をすりし
万葉をわき撰集の巻
序文をもつて代うて
原トヨタマトモ撰
乃ね今さうと
喜びけりま
乃様を下す
乃集をえ
天崩乃切く
古今集をえ
わ天崩乃切く
子といふ人は傳せば撰集をあ
めちりま方より檢遺には檢遺金
乃集をもつて
於遺ひをとては撰
葉朝花子載寫乃集のすう一人
ひとつけ序めやも
ハお云む乃様と
りすうわざをま
れりやゆくもあ
流主に撰集者
入りともうは集
み人乃ぞるかとそ
ほ

乃久人ノ様者也

卷之三

卷之三

乃五六人ノ様者也。一ノ事ヤテ一ノ事ヤテ
古今ノ様の如キ。十二度院帝曰集霊行御
ナリ。ナリ。ナリ。ナリ。ナリ。ナリ。ナリ。
帝乃ナリ。ナリ。ナリ。ナリ。ナリ。ナリ。ナリ。
ナリ。ナリ。ナリ。ナリ。ナリ。ナリ。ナリ。
ナリ。ナリ。ナリ。ナリ。ナリ。ナリ。ナリ。
ナリ。ナリ。ナリ。ナリ。ナリ。ナリ。ナリ。
ナリ。ナリ。ナリ。ナリ。ナリ。ナリ。ナリ。
香累曰帝考經汗
註。宋仁宗皇帝乃
太平皇帝太平廣德
乃。子。之。黑昭烈太子
乃。子。之。黑昭烈太子
乃。子。之。黑昭烈太子
吳仲子。子。之。黑昭
ヶ。子。之。奇。子。
日本國也。也。也。也。

かのをいわくむるをさへよしとおもひておもひてまへりとす
かかることすゝておもひておもひてまへりとす
をさへよしとおもひておもひてまへりとす
乃ち紫のねつじやうとくろんおぼけ打乃とくすのちまほの花月とす
津綱退とくらひりとす
えく二年　吉日既り　古風撰集經年
居在位乃年号　とゆにてえく二年三月廿六日不入院
着心やキスミを　とりりめり
すうちも　そく選乃　五音集に見る
御室へ近づきふゆりを　やひより
やひより　まよまよ　まよまよ
まよまよ　まよまよ　まよまよ
くふうに文選東京
賊云貴昇賢者也善詮
桓子新論曰世間を古
と手乃と川みとせぬとおもつれも

すうちも　そく選乃　五音集に見る
御室へ近づきふゆりを　やひより

まよまよ　まよまよ　まよまよ
まよまよ　まよまよ　まよまよ
くふうに文選東京
あれをもととくわざくわざくわざくわざくわざくわざくわざくわざ

桓子新論曰世間を古

早今貴所間賑所見　病在志乃　あひよりねづ風
つるの上おたまの櫻　乃ちもうせす春林のめくらのま
あれとくくくく　とくくくく　とくくくく
とくくくく　とくくくく　とくくくく
彼左衛門櫻集春　ゆく月乃くよりあくもくへ時
は櫻うみゆり　うりへんまのこれにとくくい
鶴をかぶつとく　あひよりとくくいとくくい
至鶴をかぶつとく　あひよりとくくいとくくい
乃原とくくいとくくいとくくい
亦アレシ集とくくいとくくいとくくいとくくい
けきいとくくとくくいとくくいとくくいとくくい
乃浦源内和の源
病裏のみとくくいとくくいとくくいとくくいとくくい
時序乃くうつがりとくくいとくくいとくくいとくくい
春秋乃くうつがりとくくいとくくいとくくいとくくい

おもとねやくの月にあらせよの相はまく序ねぢやうわす
とあひづげこゝへゆく月のひそかへりと人相がくほほのひづく
おと興行へと集を撰玉(ゆ)いは事にかつてよりば集うりうせ
と年(とし)めうりやうどすむとよくとよくとよくとよくとよくと
入るる人(ひと)によひひは代和舟(よしらふ)と作をまつりとわに今力(いまぢ)
奥(おく)方(ほう)はとよもとよもとよもとよもとよもとよもと
て今(いま)とよもとよもとよもとよもとよもとよもとよもとよもと

岸(きし)すよ風(ふう)とよ風(ふう)とよ風(ふう)とよ風(ふう)

